
カモメ

edge

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カモメ

【Nコード】

N6402C

【作者名】

edg e

【あらすじ】

1969年7月、アポロ11号による人類はじめての月面着陸が成功し、紙面やニュースを賑わせていた。しかし、僕らにはそれよりも大切な毎日を生きる必要があった。彼女はいずれ死ぬかもしれない病魔に冒されていた、、、、

なま乾きの”かさぶた”をはがすような毎日だ。
じくじくした痛み。

僕は永遠とその痛みと共に生きていくのだろう、。。。

1969年7月、僕は病室で彼女とテレビをただ、ボンヤリと眺めていた。

アポロ11号が月面へ降り立ったニュースが連日テレビをにぎわせていた。

「ひとりの人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては大きな飛躍だ」

人類ではじめて月面へ降り立ったニュー・アームストロングの一言がいつまでも耳に残っていた。

「人間が月へ行けるのに、君の病気は何で治せないんだろうね？」
現代医学の全てを注ぎこめば彼女の病気は治るんじゃないかと期待する、

そしてそれを本当に願う男が振り向きざま、そう言いながら彼女を見た。

彼女はあんた馬鹿じゃないの？とでも言いたげにタメ息まじりに言った。

「私の病気が治ったところで月にはいけないでしょう？　ねえ？」
僕と同様にほぼ毎日見舞いに来ている彼女の親友に彼女が投げかける。

「だよな」彼女の親友も呆れ顔で同意している。
しかし、ここで死を待つ彼女が、そしてその死を受け入れなければならぬであろう僕が、どうすれば人類の大きな飛躍を歓迎できる

んだろうか？

未来がないのだ。

あえて言葉にすることはないが。

彼女は彼女の死、僕は彼女の死を毎日見ているのだ。

そんなことを知らないアームストロングには悪いが、能天気なヤツ
としか当時の僕の目には映らなかった。

二人が付き合い始めたのは高校生の時だった。

テニス部のキャプテンをつとめていた彼女は、はつらつとした日焼け顔のまさしく少女らしい少女だった。共に同じ大学へ進み、就職を控えた大学4年の6月に、彼女の病気は発症した。

正式に婚約をしていたわけではないが、共に両親とも仲良く、そうなることが当たり前のように二人の全てが動いていたし、そこに何の障害もないはずだった。

二人の全ては二人で1つの人生になると確信していた。

治しようのない病気はいつの時代にもあるものだ。

しかしそれは、それに直面しない者にとっては月面着陸と同様に、テレビや新聞のものでしかない。

彼女は死を覚悟しなければならぬ病気を受け入れられず毎晩泣きはらし、僕と彼女の両親も、僕も目の当たりにした現実を受け入れることが出来なかった。僕たちには彼女の死を見つめる他に、もう1つの覚悟をしなければならなかった。万が一ではあるが、彼女のいない世界で生きて行かなければならない現実を受け入れなければならぬ覚悟を、心の”片隅”に用意しなければならないのだ。

彼女が入院したからと言って外へ出ない日がないわけではなかった。僕の休みに合わせて彼女はシビアに体調を管理していたらしく、外泊の許可を主治医に申し出た。

そりゃ病気だからいつも彼女の思い通りに行くわけではなかったが、

よほどの事がないかぎり土・日は実家へ戻り、月曜日から金曜日まで入院生活をする、というサイクルだった。

彼女が外泊の許可をもらうと必ずドライブへ出かけた。

彼女はとにかく遠くへ行きたがった。

それも毎回ちがうルートで行こうと毎回僕に懇願した。

その時の彼女の瞳は、死にたくないと言えかけるような気迫がこもっていた。僕はそれをさりげなく了解した。

彼女が喜ぶからだ。

どんなに遠くへ行つて疲れていても、海岸線のパーキングへ停車して車中から水平線に浮かぶ夕日を眺め、僕らは会話した。今までの人生をたどるように、これからの人生があるように、思い出と未来をすべて現実のモノにしようとするように語り合った。

しかしいつだって特別で楽しいはずのドライブが、彼女の一言が発端で大喧嘩したことがあった。

もう少しでいつもの海岸線のパーキングだった。

「来週はどこへ行こうか？」

口を開いたのは僕からだった。

「この世の全てを見るまで死ねないわ」

「死ぬとか言うなよ。死なないよ」

死という言葉が彼女が発した時点で僕はキレていた。

言い方が悪かった。が、それが良かったのかもしれない、彼女が止め処なくホントウの本当の本心を語ってくれたからだ。

「本当にそう思う？入院してたつて治療と言う治療もないのよ？毎朝・毎晩体温を測つてそれを記録され、主治医は体調を問診するだけで、定時の点滴だつてただのビタミン剤！治しようのない病気を抱え、いつ死ぬかもわからないって告知され、生きていく勇気がわく人なんているの？教えてよ。ねえ、教えてよ。私は1年後のあなたは何をしているのか、知らないのかもしれないのよ。」

彼女はもともと喧嘩やいい争いが嫌いな性格のせい、うつむき、声を荒げるのがやつのようだった。僕は彼女の本心に応えなければならなかった。

ここで慰めたり、落ち着かせるのは僕の愛し方ではなかったからだ。僕は自分を主張し、彼女も自分を主張し、二人の未来を1つに作っていくのだ。それが彼女が死のうが死ぬまいが二人と言う単位を1つにする術だと思った。

「そうだ、君は死ぬかもしれない。生きていくのかもしれない。僕は行き続ける方に賭けなければならないし、万が一、万が一君が死んだらその事実を受け入れられずに生きていかなければならないだろう。君は僕で僕は君なのに、そのどちらかがいなくなってしまうことを今、ここに君も僕もいるのに、考えられるわけないじゃないか」

僕は彼女の前で不覚にも涙を流してしまった。

手立てのない現代医学と、無力な自分に悔しさがこみ上げたのだ。

弱音は吐いちゃいけない。

彼女が生きているのに、その病魔に僕らは負けてはいけないからだ。きっとその内、そんな事もあったよねって、将来としをとったしわくちやの君が、じいさんになった僕の横で笑ってなければならぬからだ。

アポロが月面着陸してから3ヶ月経っていた。

彼女の外出許可が減り、病魔は確実に彼女をむしばんでいった。

彼女と僕が付き合い始めたあの頃の日焼けした面影はなくなり、彼女は白くやせ細っていった。

あの喧嘩以来、彼女は普通に戻った、と言っより更に強くなっていた。外出をねだる僕に「病室と思うから特別なよ。だってここが今の私が暮らしていくところなのよ？」と僕がたしなめられる始末だ。僕は相変わらず彼女以外想うものはない、が唯一、彼

女の親友と隠し事をした。

彼女の親友はすでに全てを用意していた。

「11月、雪が降る前にあなたたちの結婚式をしよう！」
考えてもいなかった。

病気が治ったら結婚しよう。

それが僕と彼女の将来への願懸けだったからだ。

戸惑う僕に、彼女の親友は「友達が主催なんだからいいじゃん！あの娘が退院したら本当の結婚式よ。式場も押さえてあるからパジャマでも何でもいいから連れてきて！」
そう言い放ち、僕が何かを答える間もなく去っていった。

秘密の結婚式を知らないのは彼女だけだった。

彼女の母から聞いていたのは、最近僕が見舞いに来る直前に、自分で起き上がることができないと言って、起こしてもらっていたことだった。毎日会っていてもわかるほど、少しづつ、少しづつ換えたのシーツに同化するように彼女は白く透けていくように見えた。それとは反比例して彼女の瞳は、凜として輝きを増していった。笑顔と冗談のたえない病室からは、いつも笑い声がもれていた。自分に未来はあるのだと、訪れる毎日に応えようと彼女は生きていた。

金曜日の夜、僕と僕の両親、彼女の両親総出で主治医に外出許可をもらいに言った。うなずくしかない主治医を尻目に僕は足早に彼女の病室へ向かい得意げにドアを勢いよく開け、笑った。

彼女はいきなり笑いかける僕を理解できぬ間に病院から式場へさらわれてしまった。

控え室でドレスに着替えさせられた車椅子の新婦とそれを押す新郎、

テーブルは円形に組まれ、二人の祭壇は式場ど真ん中のバリアフリーの360度見渡せる彼女特製の祭壇だった。祭壇の周りで彼女の知る面々が拍手で迎え入れてくれていた。何が起きているのか理解できない彼女の左手の薬指に僕が指輪をはめようとしたところで彼女は何か起きているのかを理解できたらしい。彼女は泣いていた。

ぼろぼろと、、、、という言い方しか出来ないほどの涙を流したが、それは彼女のうれし涙ではなかった。

「帰して、病院に帰してよ。嫌だよ。私の知らないところでこんなこと、、、、」

僕の袖を引つ張って彼女はたじろいでいた。

「何で？みんなが、しかも君の親友が企画してくれたんだよ？楽しもうよ？みんな祝ってくれてるんだから」

「楽しくなんかないよ。楽しくなんかないよ、、、、まるで私が死ぬ前に結婚したいみたいじゃない！こんなの私たちの結婚式じゃない！二人の結婚式は病気が治ってからよ。」

大きな声だった。怒ったのだ。

結婚式は将来のある二人のためにあるものだ。

それを悟っていながら僕は、彼女の親友に担がれたことを一瞬後悔した。その瞬間、この披露宴を主催した彼女の親友が祭壇に上がり彼女に言った。

「よかった、、、、私はあなたがあきらめてるんじゃないかと思って心配してたのよ。彼が病室に来る前にベッドから起き上がることが出来ないことを、彼に隠してたでしょう？ベッドからあなたを起こしてくれるのはお母さんじゃなくて彼なのよ？その意味がわかる？本当だったらあなたたち今頃結婚してたよね。たまたま、あなたが病気でこの時期に結婚式できないから祝ってあげたかったの、親切の押し売りだけど、、、、」

隠しごとへの後ろめたさから、彼女の親友は困惑していたがさらに続けた。

「あなたたちの結婚式には出席させてもらうから、私たちからの結婚式を受け取ってくれる？」

彼女の親友も泣きながらホンキで怒っていた、僕に体調の悪さを隠す姿に弱気な一面を見たのだろう、それよりも彼女の容姿を変えていく病魔に対してだろうか？多分、どちらにもだろう。

場違いだが、なんて大がかりな説得の仕方だ、と思った。が、それが親友からの大きなエールだった。彼女はうなずいて、すぐにいつもの笑顔を取り戻り、披露宴は無事終えた。

あくる月、つまり12月、彼女はこの世からいなくなってしまった。涙も声も、自分の存在すらもなくなるほど泣いた。

彼女はもうこの世にはいない。

いくら頭ではわかっていても、胸に手をあてるたび君しくない。

初七日を終え、慰問客が去った仏壇に線香をあげた。

不意に彼女の母が僕の横へ正座して丁寧に手紙を差し出した。

「これ、、、」

「なに？」

「あの子、みんなに手紙を残していたの、友人や私たち、あなたの両親にも、、、」

渡された封筒には何か大切なものが詰まっていそうで、その日はうまく手紙を開けられなかった。

次の日、彼女の手紙を助手席へ乗せ、ドライブへ出かけた。

いつものように帰りしな、海岸線のパーキングに停車したまま彼女と話をしていた。

もちろん実在しない彼女との対話はないが、彼女がとなりにいるような気がしたまま夕日を眺めていただけだった。

彼女はもうこの世にはいない。

沖を飛ぶカモメは所在ない僕の心のように漂うだけだ。

二人が共有した時間や場所はたくさんあったが、ここで手紙を読むことにした。

封筒の中には2枚の写真と一枚の便箋が入っていた。

例の披露宴の集合写真と、今いるこのパーキングで彼女が撮影した夕日に映る僕の横顔だった。

くありがとう

ありがとう、あなたに会えて良かった。

ありがとう、それが全てです。

ありがとう、どうか悲しまないください。

ありがとう、空に帰る時がきただけのような気がします。

不思議と怖くありません。

ありがとう、たくさんドライブへ連れて行ってくれて。

あなたを想うとき、いつもこの写真の横顔が浮かびます。

いつも、いつも違う景色の中、あなたの横顔を見ながらドライブしたけれど、あの海岸線のパーキングで見るあなたの横顔が一番好きでした。

ありがとう、私に未来をくれて、ありがとう、。。。

彼女はどんな想いでこの手紙を書いたのだろうか？

涙でヨレヨレになった手紙を清書しなかったのは、それが出来ないほど気持ちを込めたからだろう。大切なヨレヨレの手紙を、さらに

僕の涙でヨレヨレにしまった。

家へ帰るとTVでは相変わらずアポロ11号の月面着陸の報道が流れていた。

「もう見飽きたな」と、となりで親父がお茶を濁していた。

もしも、もう一度 彼女に会えるなら、彼女が月にいたって駆けつけられるだろう。アームストロングの言う”偉大な人類の飛躍的な一歩”はどうしてもよかった。

もう一度君に会うための一歩を踏み出せる場所があるなら、月だって僕一人のチカラで行ける気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6402c/>

カモメ

2010年12月8日08時54分発行